

「問題」「解答・解答例等」「出題の意図」

<p>選抜区分</p>	<p>2026年度 (選抜区分：外国人留学生特別選抜) 法学部 両学科共通 (科目名：日本語小論文・面接)</p>
<p>出題の意図 (評価のポイント)</p>	<p>法学部では、外国人留学生特別選抜試験において、小論文及び面接試験を実施している。小論文では、社会問題に関する基礎的な文章を読んで、その内容を的確に理解・整理する能力(文章読解力)、及び、そのうえで自分の考えを論理的に表現する能力(自説展開力)を確認している。また面接では、法学及び政策科学を学ぶ主体的意欲があるか、社会問題への幅広い関心とそれに対する自身の考えを有しているか、またそれら意欲や知見を的確に日本語で表現できるかを問うている。こうした点を総合的に勘案し、入学後に速やかに法学・政策科学の学習へと取り組み、所期の目標を達成することが十分に見込まれる学生を選抜することを狙いとしている。</p> <p>1. 小論文</p> <p>(1) 課題文選択の背景</p> <p>課題文の出典は、アジア太平洋資料センター編『コロナ危機と未来の選択』(コモンズ、2021年)の第3章に所収された、斎藤幸平「ポスト資本主義のビジョンー気候正義と<コモン>の再生を」(68-82頁)の一部を抜粋したものである。本稿は、経済思想家である筆者が、近年、人類社会が直面している気候危機に対して現在、取り組まれる対策を批判的に論じたものである。</p> <p>課題文において筆者は、「SDGs」や「グリーン・ニューディール」といった、資本主義の大枠を維持した上で取り組まれる「小手先」の対策を批判し、より抜本的に資本主義のあり方そのものを変革する必要性を説く。まず、筆者はSDGsを例に挙げ、企業がたとえ気候危機への本質的な対策を取っていなくとも、SDGsを標榜することによってエンカールでサステイナブルな企業イメージをPRできる道具となっている点を指摘し、それを「大衆のアヘン」とであると批判している。次に、筆者は現在の気候危機対策が、新技術の開発により将来的に実現されるはずだという技術信仰に基づく点を指摘する。そして、そうした脱炭素のための諸技術が二酸化炭素排出の一定の削減と引き換えに周辺国から大規模な土地や資源を収奪し、生態系や人びとに負荷をかけていることを踏まえ、そうした対策のあり方を生態学的帝国主義と批判する。また、環境に配慮する「緑の経済」に財政出動や公共投資を行うことで雇用の創出を目指すグリーン・ニューディール政策についても、それが資本主義の枠内で経済成長を目指してモノを生産し続けることを前提に実施されている点を批判する。以上を踏まえ、筆者は気候危機対策には資本主義そのものにブレーキをかけ、大量生産・大量消費型の社会から</p>

の抜本的な変容が必要であると唱えている。

課題文の内容は、気候危機といった国際的にも広く関心を集める社会課題を取り上げるものであり、外国人留学生の受験生にとっても、これまでの学校教育の中で少なからず学んだことのある話題であると考えられる。その上で、課題文において筆者は、ただ環境保護への意識を高めて、環境に良さそうな取り組みをすることを推奨するのではない。資本主義の下、一見、環境に良さそうな取り組みも、企業のイメージ戦略の道具とされて本質的な対策の実施をむしろ遠ざけていること、そして、そのような取り組みが周辺国の生態系へと負荷をかけることと引き換えに成り立っていることなどの構造的な問題を指摘している。法学・政策科学を学ぶための基礎体力として、社会課題を構造的に理解する読解力が身についているかどうかを、本問では主として問うている。

(2) 受験生に何を望むか

第一に、筆者が整理した、現在の気候危機への対策が抱える構造的な問題点についての要点を適切にまとめて、筆者がその背景事情とする視点について簡潔に示すことが求められる（読解力）。その上で、課題文で展開される批判に対して、自らの立場を論理的・説得的に述べることが求められる（自説展開力）。

2. 面接

(1) 第1問：志望理由

学科の志望理由と入学後にどのようなことを学びたいかを問い、受験生が自分自身の言葉で順序だてて要領よくまとめて説明ができるかを評価した。その際、日本への留学、また当学科における勉学が、その後の受験生の進路にどのように活用できるかについても併せて問うた。

(2) 第2問：社会的関心①

昨今加速度的に開発が進み、あらゆる局面で活用されるようになってきている生成系人工知能（生成 AI）を取り上げ、大学の課題やレポートの作成に学生が生成 AI を用いることの功罪を踏まえつつ、その是非について、自らの意見を組み立てて表現する能力の有無を確認する問題である。なお、存在しない参考文献を挙げるなど明らかな不正行為として認定されている事態がすでに生じているという点が面接官からの問いかけの中で示されており、AI 使用は現実にこのような弊害を招いていることを起点とした受け答えが求められる。

こうした AI 使用については、一般に、文章作成の効率化に資するという賛成の立場がある一方で、学生の思考能力の低下を招くとの批判があるが、いずれも紋切り型の評価であろう。現実的にはそれらいずれ

にも還元できない方向性の考案が求められる。例えば、もはやAI活用は避けられないため、何を／どこまで許可するかの線引きやガイドラインが重要である。あるいは、上記不正行為を防ぐには生成AIが作成した文章内容を学生自身が今一度精査する必要があるため、必ずしもレポート作成作業は効率的にはならず、なおかつ学生の思考能力が低下するという点も保留されるのではないか、といった観点があげられよう。受験生には、このような状況を想起したうえで、自分の言葉で応答していくことが求められる。

なお、本問は受験生にとって当事者性の高い話題とも考えられる。上記の観点に限らず、自らの見聞に基づいて生成AIがもたらす影響を考えながら、自分の見解を論理的・説得的に表現することが期待される。